
願い事は一つだけ。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い事は一つだけ。

【Nコード】

N0740M

【作者名】

はなちよこ

【あらすじ】

主人公の圭太には大好きな彼女、舞がいる。

しかし彼女は病にかかり、残された命はあとわずか。

それを知った圭太は舞を救うべく、ある島へと訪れる。

見慣れた町並みを自転車で走る。

自転車のカゴにはピンクのバラとかすみ草の花束。

決して豪華ではないが、それでも舞はいつも喜んでくれる。

建物の中はいつものようにざわざわしている。

階段を上がって廊下を少し歩くと大きな扉がある。

そこを開けると、見慣れた光景が広がる。

パタパタと足音を立てて看護師さんが慌しそくに

俺の横を通り過ぎて行った。

一瞬、ドキツとした。

俺はさっきの看護師さんを目で追った。

看護師さんは出入り口のすぐ隣の病室に入って行った。

俺はホツとしてまた歩き出した。

コンコン。

ドアを軽くノックする。

「はい。どうぞ」

聞き慣れた声が聞こえた。

俺はドアを開けてニッコリ笑った。

「圭ちゃん！」

舞は俺の顔を見ると嬉しそうに笑った。

真っ白なベッドの上に座る舞はいつもと変わらない。

でも。

前より痩せたし顔色もあまり良くない。

「はい」

俺は花束を舞に見せた。

「わあ！ 綺麗！ いつもありがとね」

舞はキラキラした目で俺が持っている花束を見た。

「花瓶に入れておくよ」

俺はそう言ってベッドの横のテーブルの上に置いてある

花瓶を手に取って、病室の隅にある水道で花瓶の中に水を入れた。

「いつも圭ちゃんが花を持ってきてくれるから、お母さん達は花を持ってるこないの。圭太君が可愛い花を持ってくれるから助かる、って言ってた」

舞が流れる水に負けないように少し大きな声でそう言った。

「そうか。それじゃあもつと豪華なのを持って来ないとな」

俺はそう言って笑いながら蛇口をキュツとしめた。

「いいよ。十分豪華よ」

舞はそう言って俺にニツコリ笑った。

「誕生日にはもつと豪華なのやるよ」

「誕生日・・・」

舞がそこまで言うとなを向いた。

そして俺の顔を見てこう言った。

「半年後の私の誕生日までには退院したいな」

舞はそう言って少しだけ微笑んだ。

「その頃には退院してるよ」

俺はそう言うのと花を入れた花瓶をベッドの横のテーブルに置いた。

「圭ちゃんは嘘つく時、私の顔を見ないよね・・・」

「・・・え？」

俺は驚いて舞を見た。

舞はニツコリ笑ってこう言った。

「冗談。今日は何時までいるの？」

「あ、ああ。今日はちよつと用事があるんだ」

「もう行くの？」

「うん。ごめんな。ゆっくりできなくて」

俺はそう言うのとドアの方へゆっくり歩いた。

「いいの。浮気しちゃダメだよ」

「舞だけで手一杯だよ」

「ふふ。花いつもありがとね」

舞が笑顔でそう言った。

俺は舞にニツコリ笑って病室を出た。

病棟を出た所で俺は壁にもたれて、ため息をついた。

舞は重い病気にかかっていて二ヶ月前から入院している。

昨日、舞のお母さんと病室の廊下で会った。

その時、舞のお母さんはこう言った。

「舞は・・・・・・・・もう長くは生きられないだろうって・・・・・・・・」

俺は目の前が真つ暗になった。

信じられなかった。

嘘だと思った。

嘘であってほしい。

だけど。

どんどん痩せていく舞。

顔色が悪い舞。

一日中ベッドから起きられない日もある。

そんな現実が、俺の「嘘だ」という気持ちを打ち消した。
でも。

舞を死なせない。

昨日、一晩中考えたんだ。

舞を助ける方法の一つだけ。

あそこに行けば舞を助けてもらえるかもしれない。

俺はポケットから財布を取り出した。

財布のお札を数えて財布をしまった。

「よし」

俺はそう言っていると急いで病院を出て自転車をこいで駅へ向かった。
電車に乗ると窓の外をぼんやりと見つめていた。

舞とは幼なじみだ。

家が隣同士で小さな頃から一緒に遊んだ。

俺は小さな頃から舞のことが好きだった。

真っ黒な長い黒髪。真っ白な肌。笑うと太陽みたいで。

俺の胸をいつもドキドキさせた。

あれは中学二年のバレンタインの時だった。

「圭ちゃん、このチョコ本命だからね！」

そう言って舞が綺麗にラッピングされたチョコを俺に渡してきた。

「……………え?!」

驚く俺に舞は頬を赤く染めて俺の顔を見ていた。

「ホワイトデーはペアリングだな」

俺がそう言っていると舞はニッコリ笑った。

俺が大好きな舞の笑顔。

その日から俺と舞は付き合うことになった。

なかなか手もつなげないような俺達だけど。

それでも舞と一緒にいる時間は幸せだった。

ホワイトデーにはペアリングを買って

一つを舞に渡した。

真ん中に星のような形の小さな青い石がはめこんであるシルバーリング。

今も俺と舞の右手の薬指に光っている。

「あれから三年か……………」

俺はそう呟いて右手の薬指の指輪を見た。

青い石が太陽の光に当たってキラリと光った。

舞と一緒に受験勉強をした。

同じ高校に入れた時は飛び上がって喜んだ。

同じクラスになった時、俺は舞に思わずこう言った。

「俺達って運命なんだって」

舞はクスクス笑ってた。

でも、その後、舞は大きく頷いた。

学校へ行く時もお昼を食べる時も帰る時もいつも一緒。

ケンカも何度かしたけど

その度にお互いの絆が深まっていく気がした。

俺達はずっとずっと一緒にいられるんだと思ってた。

そう信じてた。

でも。

舞は高校二年になってすぐに体調を悪くして

学校を休むことが多くなった。

そして。

夏休みに入る前に入院になった。

俺は毎日欠かさずにお見舞いに行った。

舞は毎日俺を見ると笑顔を見せた。

俺の大好きな笑顔。

「誰が舞を連れて行っていていいって言ったんだよ」

俺は空を見上げてそう呟いた。

拳をギュツと握った。

一時間ほど電車に乗るとバスに乗り換える。

バスで三〇分ほど行ったところにフェリー乗り場がある。

俺はそこでバスを降りた。

フェリーに乗ると空いてる席に座る。

この時間は客があまりいなかった。

フェリーがゆっくりと動き出した。

海の上をフェリーが走る。

しばらくするとフェリーの窓の外から島が見えてきた。

俺の母が育った島。

毎年、夏休みにはこの島の母方の祖父母の家に

両親と俺で遊びに行くのだが

今年は俺は行かなかった。

舞の側にいたかったから。

だから一年ぶりに見る景色だった。

三〇分ほどしてフェリーが止まる。

フェリーを降りて島に一步、足を踏み入れる。

目の前にはお土産屋や民宿が並んでいる。

少し遠くに小さな山が見えた。

もう何度も見ている景色だ。

「行くか」

俺はそう言って歩き出した。

喉が渴いたので自動販売機でジュースを買った。

コーラのボタンを押そうとしたが

ピーチジュースのボタンを押した。

ガコン。

その音を聞くと取り出し口からピーチジュースを取り出した。

一気に飲み干す。

舞の嬉しそうな顔が頭に浮かぶ。

「私、ピーチジュース大好き」

そう言って美味しそうにジュースを飲む舞の顔。

いつも舞はピーチジュースを買ってたな。

今もお見舞いに持つ行ってる。

舞は俺の持っていたピーチジュースをいつも嬉しそうに飲むん

だ。

「舞は……もう長くは生きられないだろうって……」

「

泣きそうな声で俺にそう言った舞のお母さんの言葉を思い出した。
その声が耳の奥で何度も繰り返される。

俺は頭を大きく左右に振った。

拳をギュッと握り唇を噛み締める。

「舞は俺が助ける」

俺はそう言って走り出した。

あの森へ向かって。

あの時のことは今でもハッキリと覚えていた。

一〇歳の時に夏休みにこの島に来た時だった。

山の手前にある森に入ったら道に迷ってしまった。

しばらく歩いていると目の前に洞窟のような物が見えた。

洞窟の中から小さな光が見えた。

俺はまるで吸い込まれていくかのような洞窟の中に入った。

真っ暗な洞窟の中を遠くに見える光を頼りに歩いた。

洞窟を抜けると。

目の前に広がっていたのは。

森の光景だったけど、俺がさっきまでいた森とは違っていた。

沢山の木はどれも大きくて太くて空まで届きそうなくらい長く伸びている。

びている。

森全体が不思議な光を放っていた。

そして。

木の枝や根元、地面の上や空中に

キラキラと光っている小さな生き物が見えた。

俺は目をこすった。

見間違いじゃない。

その生き物は人間のような姿をしていた。

「うわあ！」

俺が驚いて声を上げるとその生き物達が一斉に俺を見た。

俺は後ずさりをした。

体が震えた。

その生き物の中の一匹……というか一人なのか。
俺の顔の近くまで飛んできた。

人間の女の子のような姿のしているが

ふわふわしたウェーブのかかった髪は緑色で

白いワンピースのような服。

背中に七色の羽がついてる。

そしてその体は当時一〇歳だった俺の手より小さい。

「あなた私達が見えるのね？」

その生き物の言葉に頷いた。

「へえ。そうなの」

俺は震える声で聞いてみた。

「ここは……どこ？あなたはだれ？」

生き物は腰に手を当ててこう言った。

「ここは妖精の森。私達は妖精なの。私の名前はクレア。あなたの名前は？」

「……圭太……」

「圭太ね。もしかして道に迷ったの？」

妖精、クレアの言葉に俺は頷いた。

「そう。じゃあ家に帰してあげるわ」

クレアがそう言うその後ろから別の妖精の声がした。

「クレアは本当、若い人間の男の子が好きよね」

「うるさいわねー。そんなじゃないわよ」

クレアが後ろで笑う妖精に向かってそう言う。

小さな小さなステッキを振り回した。

辺りが光に包まれて俺は眩しくて目を閉じた。

「着いたわよ」

クレアの声に目を開けると目の前は祖父母の家だった。

「あ、ありがとう……」

僕がそう言うときクレアはニッコリ笑った。

「またゆつくり遊びに来なさいよ。人間の話も聞きたいわ」
クレアはそれだけ言うパツと消えた。
クレアが消えた後にはキラキラした光だけが残っていた。

次の日。

俺は「そんなの夢だ」という父と母を連れてあの森へ行った。
どうにかして洞窟を見つけたが、その洞窟の奥は光っていなかった。

洞窟を抜けると、そこは見覚えのある森。

昨日の妖精の森ではなかった。

「やっぱり夢だったんだよ」

両親にそう言われ家に戻った。

あれから何度もあの森へ行って洞窟を抜けたけど。

妖精の森には行けなかった。

毎年、思いついたように行ってみたが。

俺が再び妖精の森を見ることはなかった。

あれは幻だったんだ。

俺もそう思うようになった。

「ねえ。圭ちゃん。見てみて。妖精って可愛いよね」
ちょうど三日前。

舞がベッドの上で本を開きながらそう言った。

それは妖精の本だった。

「妖精？」

俺はその本を覗き込んだ。

そこには俺があの時、あの森で見た妖精とそっくりの絵が描かれていた。

「妖精は森に多いことです。」

その姿を見ることは誰にでもできるわけではありません」
舞が本に書かれた文字を読み上げる。

俺は言った。

「まだそんな子供の読む本、読んでんのか」

「いいじゃない子供の読む本でも」

舞はそう言うたとさらにこう続けた。

「妖精はいるのよ。私は信じてる」

そう言って窓の外を見た。

だから俺は決心したんだ。

昨日、舞がもう長くないということを聞いて

決心は固まった。

今まで貯めていたバイト代を少しだけ銀行から下ろしてきて
この島に行くことにした。

妖精の森へ行くために。

クレアに会いに行くために。

残された望みはただ一つ。

クレアに舞の病気を治してもらうんだ。

できないかもしれないし

あれはやっぱり幻だったのかもしれない。
でも。

可能性が1%でもあるならそれに賭けようと思った。

「あつた・・・」

森を歩いてあの洞窟を見つけた。

洞窟の奥には小さな光が見える。

あの時と、妖精の森を見たときと同じだ。

俺はドキドキする胸をおさえて洞窟に入った。

奥の光を頼りに洞窟の中を進んで行く。

洞窟を出ると。

「やった！」

俺はそう言っただけガッツポーズをした。

俺の目の前に広がっているのは。

あの時に見た風景と同じ。

妖精の森だった。

妖精がみんな俺の方を見ている。

一人の妖精が俺の方へ飛んできた。

「圭太じゃない！」

そう言っただ俺の顔の目の前で止まったのは。

「クレア！」

そう。

あの時、俺を助けてくれた妖精、クレアだった。

「大きくなったわね。でも面影があるわ」

「クレアは変わらないな」

「相変わらず可愛いってことね」

「ま、そういうことで」

クレアと歩きながら会話していると。

クレアは一本の木の前で止まった。

その木も太くて大きくて空まで届きそうなほど高い。

クレアは「ちょっと待って」と言っただ木の下にある

小さなドアに入っただ行っただ少しすると出てきた。

「ハーブティーでもどう？」

クレアがそう言っただ小さな小さなティーカップを二つ持っただ俺の前座る。

クレアが一つのティーカップに人差し指をちゃんと当てると

ティーカップは一瞬で大きくなっただ俺にちょうどいいサイズになった。

「圭太は家には入れないわね。外で悪いけど座って」

俺は言われるがままにその場に座った。

クレアは空中にふわふわと浮かびながら座った。

ちょうど俺の顔の前だ。

「いただきます」

俺はそう言つてハーブティーを飲んだ。
少し気持ちが落ち着いた。

「で。何かあったの？また道にでも迷つた？」

クレアがそう言つと俺は首を横に振つた。

それまで笑つていたクレアの顔が真剣な顔になった。

「なに？どうかしたの？」

「あれから何度もここに来ようとしたけど来られなかった」

「そりゃあ人間がはいはい来られる場所じゃないもの」

クレアはそう言つとハーブティーを一口飲んだ。

そして続ける。

「子供の頃はたまーに見える子がいてね。

それでも何か困つたことや助けてほしいことがないと、ここには来られないの」

「そうだったんだ」

「もう圭太も１７歳よね？その年齢になつてもここに来られるなんて、すごく困つている事でもない・・・」

「そうなんだ」

俺がそう言つとクレアは俺の顔を見た。

「妖精は人間の願いを叶えられるのか？」

「ええ・・・。その妖精に叶える気があるのなら」

俺は小さく深呼吸してからこう言つた。

「ある人の命を救つてほしい」

クレアが目を見ん丸くしてこう聞いた。

「ある人？」

「俺の彼女。重い病気なんだ。もう長くは生きられないって言われた」

クレアは俺のその言葉を聞いた瞬間。

慌ててドアを開けて家に入ってしまった。

俺は驚いて小さな小さなドアをノックした。

「クレア？　どうかしたのか？！」

ドアの向こうから泣いている声が聞こえた。

「仕方ないわよ。クレア、あなたのことずっと待ってたのよ」

その声に後ろを振り向くと黄色の髪をツインテールにした妖精が立っていた。

俺は驚いて聞き返した。

「待ってた？」

「クレア、あなたに恋をしたのよ。まあ、一目惚れだったみたいだけど。」

でもずっと待ってたのよ。あなたがここに来るのを」

「………そんな」

俺はそう言つて下を向いた。

そしてその妖精にこう言った。

「お願いです。僕の彼女を助けてください！」

「ごめんね。クレアがあんなにあなたを待っていたことを知つて、その願いは叶えられないわ」

「でも人の命なんです！」

「人の命ね………そう言われても正直、人間は人間。妖精とは違う生き物よ」

その妖精はそれだけ言うとうわりと飛んでどこかへ飛んでいってしまった。

しばらくクレアの家の前にはいたが。

クレアが出てくる様子はなかった。

何度も声をかけたが返事はない。

「クレア。お願いだ。もう望みを叶えられるのは君だけなんだ」

「嫌よ！　ずっとずっとあなたを待ってたのよ！　それなのに……。あなたの彼女を助けたくない！」

「でも！」

「帰って！　今すぐここから出て行って！」

クレアはドアの向こうでそう叫んだ。

俺は仕方なく立ち上がって妖精の森を出ようとした。
洞窟の前で立ち止まる。

クレアが家から出てくる気配はない。

俺は重い足取りで洞窟を抜けて妖精の森を出た。
とぼとぼと歩きながら海へと歩いた。

辺りは暗くなってきた。

海へ行くと砂浜に腰を下ろした。

「ダメか………。最後の望みだったんだけどな………」

俺はそう呟いて近くにあった石を海に投げた。

ポチャンと小さな音をたてて石は海へと消えた。

波は静かで砂浜にも誰もいない。

辺りは驚くほど静かだ。

「舞………」

俺はそう呟いた。

舞の笑顔が臉に焼き付いている。

ホワイトデーにペアリングをあげた時。

舞は本当に喜んでくれた。

右手の薬指に俺がはめてあげると。

喜んでその右手を俺に見せた。

初めて恋人同士として手をつないだあの時。

小さな細い手はとても温かった。

お互い照れながら歩いた。

舞と一緒に受験勉強だって楽しくて。

一気に成績が上がった。

先生も両親も驚いていた。

舞も嬉しそうに笑った。

同じ高校に受かって同じクラスになって。

授業中、舞の後姿をいつも見ていた。

まるで片思いのように。

舞が俺の方を見てニツコリ微笑む度に。

俺の心臓はドキドキと鳴った。

舞の作ってくれた弁当と一緒に食べる。

今まで食べた何よりもウマイんだ。

見慣れた帰り道も舞と歩くとキラキラ輝いて見えた。

舞が隣にすることがすごく幸せに思えるんだ。

映画を観ていても。

遊園地に行っても。

街へ買い物へ行っても。

舞の笑顔を見られるのはものすごく嬉しい。

舞が隣にいるからとびきり幸せだ。

何よりも大事なんだ。

舞のためなら俺の命なんてくれてやる。

舞は俺にとつて、かけがえのない存在なんだ。

舞がいなくなったら俺は生きていけない。

舞のいないこの世界なんて生きる意味がない。

「舞がいなくなったら俺も後を追うよ……」

俺はそう呟いて海を見つめた。

「なにバカなこと言ってるのよ！」

後ろで声が聞こえた。

驚いて振り向くと。

「クレア！」

俺の目の前をクレアがふわふわと浮かんでいた。

「圭太の彼女を助けることは圭太を助けることにもなるのよね」

クレアはそう言っただけに微笑んだ。

「え……？！」

俺が驚いてクレアの顔を見るとクレアは言った。

「圭太の願い、叶えてあげるわ」

「本当に?!」

クレアの言葉に俺は嬉しくてクレアの小さな小さな手を握った。

「痛いってば。でも条件があるのよ」

俺がクレアの言葉に手の力をゆるめると

クレアは俺の手からパツと手を離れた。

「条件？」

「ええ。そう一つだけ」

「舞が助かるなら何だっていいよ！」

クレアが俺の言葉に言いにくそうにこう言った。

「その舞ちゃんね、舞ちゃんは元気になるわ。病気の元を私が魔法で消すから。でもね。そういう大きな願い事には条件がつくのよ」

クレアはそこまで言うと言俺の顔を見て続けた。

「いわゆる見返りってやつよ。大きな願い事には付き物なの」

「なに？ 焦らしてないでハッキリ言っていていいよ」

俺の言葉にクレアは少しだけ間をあけてこう言った。

「圭太と舞ちゃんは離れ離れになる。二度と会えないかもしれない」

俺はゴクンと唾を飲んだ。

拳をグツと握った。

クレアはそんな俺を見てこう言った。

「……人の命を……運命を変えてしまっんだもの。魔法をかけるのは私だけどそれを望んだのは圭太よ。人の運命を変えた人間はその相手とは一緒にいられない」

俺は右手に光るペアリングを見つめた。

舞の笑顔が浮かぶ。

「……舞は本当に助かるんだよな？ 死なないよな？」

「ええ。それは保障するわ。でも」

俺はクレアの顔を見た。

クレアは続ける。

「舞ちゃんが元気になってから、また会える保障はできない」

俺はクレアをじっと見つめてこう言った。

「いいよ。舞が元気になるならそれでいい」

俺がそう言っているとクレアはニツコリ笑ってこう言った。

「好きなのね」

「ああ。ごめん」

「謝らなくてもいいわ。私に言い寄ってくる妖精は結構いるんだから」

「そうか」

俺はそう言って笑った。

クレアも笑った。

「さて。じゃあ圭太、あなたの願いを叶えるわ」

「お願いします」

俺がそう言ってクレアに頭を下げると。

クレアが小さな小さなステッキをくるくる回した。

辺りが光に包まれた。

俺は眩しくて目を閉じた。

「舞ちゃん、すぐに元気になるわ」

耳の横でクレアの声がした。

「ありがとう！」

俺は大きな声でそう言った。

「圭ちゃん！ 私、治ったの！ お医者さんは首を傾げてたけど、でも私の病氣治ったの！」

元気になった舞がぴよんぴよん飛び跳ねながら俺にそう言った。

「良かったな！」

俺はそう言って舞にニツコリ笑った。

「うん！ありがとう！圭ちゃんのおかげだよ！」

「え？！」

俺が驚いて舞を見ると舞はニツコリ微笑んだ。

「舞、これから色んな所に行こうな。学校また一緒に行けるな」

俺がそう言うと舞の顔が突然曇った。

「それはできないの……約束なの……。私、遠くへ行くの。でも安心して！私、そこで元気に暮してるから！」

「舞……」

俺は舞に近づいた。

舞を抱きしめようとした瞬間。

舞が消えた。

「舞?!」

俺はそう言っただけで飛び起きた。

「……ここは？」

驚いて辺りを見回した。

俺の部屋だ。

いつものまに……。

カーテンの隙間から太陽の光が差し込んでいる。

枕元の目覚まし時計を手にとって見た。

「うわ！ もう昼過ぎてるじゃん！」

そう言っただけでベッドから飛び起きた。

ふと携帯で日付を確認する。

「ええ?!」

俺は驚いた。

自分の目を疑った。

だって。

あの島へクレアに会いに行った日から

三日も経っていた。

三日も寝てたのか?!

それともあの願い事を叶えたことで

三日後にタイムスリップでもしたんだろうか……。

だとしたら、なんでだ？

「母さん！俺、三日も寝てたの？」

一階のキッチンにいた母に聞いてみた。

母は驚いた顔でこう言った。

「あんた夜中に帰ってきたと思ったならそのまま風邪で寝てたじゃない。覚えてないの？」

母はそれだけ言うと洗い物を始めた。

俺、自力で家に帰ったのか？

あの島でクレアが願いを叶えてくれて。

光が眩しくて目を閉じて。

それで……………。

ああ。

全く記憶がないや……………。

覚えてるのは舞が元気になった夢を見たこと。

「いや。夢じゃない！」

俺はそう言つて家を飛び出した。

自転車にまたがる。

急いで病院へ向かった。

途中で花屋に寄つていつもより豪華な花束を買った。

病院まで自転車をとばした。

急いで病院に入ると階段を一段飛ばしで駆け上がり

舞の入院している病棟のドアを開ける。

舞の病室の前で深呼吸を3回して

ドアをノックした。

返事がない。

「舞、入るよ」

俺はそう言つとドアを開けた。

「舞？」

俺はそう言って病室を見渡した。

部屋は空っぽだった。

ベッドは綺麗にシーツがかけられていて

ベッドの横のテーブルにも何も無い。

まるで最初からそこに誰もいなかったかのように。

俺は胸がズキンとした。

体が震えた。

まさか。

舞は・・・・・・・・。

とにかく。

ナースセンターで事情を聞こう。

そう思い病室を出た。

その時だった。

「あら。圭太君」

後ろで聞き覚えのある声がした。

驚いて振り向くと。

舞と仲が良かった看護士の鈴木さんが立っていた。

「あ、鈴木さん！ 舞は？！」

「それがね。スゴイのよ！」

鈴木さんはそう言って俺に話してくれた。

それは昨日の朝のことだった。

舞が突然、すぐく体調がいいと言っていたらしい。

顔色も戻っていた。

舞の担当医が舞を診断してから、その体の変化に気付き検査をした。

あらゆる検査をした結果。

舞の病気は跡形もなく消えていたそうだ。

「こんなことは初めてだ！」

担当医はものすごく驚いていたらしい。

舞は今日、元気に退院して行ったという。

「舞はいつ退院したんですか？」

「ついさっきよ。すれ違ったりしなかったの？」

鈴木さんはそう言っつて俺の顔を見た。

俺は下を向いた。

変だな……。

ついさっき退院したのなら

どこかですれ違っつてもいいはずなのに。

そして。

俺はクレアの言葉を思い出した。

「圭太と舞ちゃんとは離れ離れになる。二度と会えないかもしれない」

離れ離れ……。

もうすでに俺と舞はどんどん離れて行っつてるのか？

いや。

舞が元気になったのならそれでいいじゃないか。

それに舞の家に行けば顔を見られるかもしれない。

鈴木さんにお礼を言っつと。

俺は急いで病院を出た。

自転車をこいで家に向かった。

必死に自転車をこいだ。

舞に会いたい。

せめて一目だけでいいから。

会いたい。

舞の家の前まで来ると自転車を止めた。

家の前の門には鍵がかかっていた。

インターホンを押してみる。
誰も出ない。

もう一度インターホンを押す。
やっぱり誰も出ない。

夕方になっても。

夜になっても。

舞の家には明かりが灯らなかった。

インターホンを押しても誰も出なかった。

とぼとぼと家に帰ると俺を見た母がこう言った。

「ポストに圭太宛の手紙が入ってたわよ」

母がそう言っただけ俺に手紙を渡してきた。

宛名を見る。

「舞からだ！」

部屋に戻って早速、舞からの手紙を読んだ。

今日、私は退院することになったよ。

病気、治ってたの。すごいよね。

お医者さんも奇跡だって驚いてた。

私、すごく元気になったんだよ。

だけど私はもう圭ちゃんの側にいられない。

お父さんの転勤先の外国へ着いて行くことにしたの。

ごめんね一緒に学校に行けなくて。

だけど私は元気だから心配しないで。

ありがとう。大好きだよ。

俺はその手紙を読み終わると、その場に座りこんだ。
舞からの手紙を手を持ったまま茫然としていた。

俺達はもう二度と会えない。

本当なんだ……。

クレアが嘘をついていると思っていたわけではない。

どうせ大したことないだろうと思ってた。
だけど…………。

「母さん！ 舞のお父さんの転勤先って知ってる？」

俺がリビングへ行ってソファに座っている母にそう聞くと

母は首を傾げながらこう言った。

「さあ…………。お母さんだってお隣が転勤したこと今日初めて知ったんだもの」

会社から帰ってきた父を見ると。

父は俺を見て首を横に振った。

俺は黙ったまま部屋に戻ってベッドに寝転がった。

舞が元気になってくれたのは本当に嬉しい。
でも。

せめてもう一度だけ会いたかった。

だけど。それは我俣な願いだよな。

俺は舞が助かれればそれでいいって思ってたじゃないか。

「これで良かったんだ……………」

俺はそう呟いて手紙をギュッと握った。

流れそうになった涙をグッとこらえた。

舞の笑顔が浮かんだ。

瞼に焼きついて離れない笑顔。

大好きな笑顔。

せめて。

せめて夢の中だけでも。

君に会いたい。

（おわり）

（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

これも過去に書いた小説です。

「二度と会えない二人」というテーマで書きたいなあと思ってこういう展開になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740m/>

願い事は一つだけ。

2010年10月8日14時38分発行